

*** 東京天文台 100 周年記念誌資料ーその 3-27-1ー 東京天文台年表(昭和 24～34 年)**

筆者が引き継いだ東京天文台百年記念誌資料については、アーカイブ室新聞 346 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料ーその 1ー」、349 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料ーその 2ー」、353 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料ーその 3ー」、という記事を書いた。これらの資料は段ボール箱 3 個に入っていたので 1 箱目をーその 1ー、2 箱目をーその 2ー、3 箱目をーその 3ーとしたのである。これらの資料についてリストの身でなく、内容を具体的に紹介する記事を書き始めたが、順不同で筆者が興味深いものをもってピックアップして書いている。今回は 3 箱目の最後の 48 項目について報告したい。第 353 号のリストには、

27. 昭和 24 年～昭和 52 年と書かれた封筒 年表原稿 43 枚

とある。アーカイブ新聞第 817 号 (2015 年 6 月 5 日) に「東京天文台百年記念誌資料Ⅲ-48 について」という記事を書いた。この時、この資料は非常に重要なので、全頁を掲載するが量が多く大きなファイルになるので 4 回に分けてアーカイブ室新聞第 817 号～第 20 号に掲載した。ここでアーカイブ室新聞 353 号を見直してみると、この資料については、

21. 明治元年～明治 45 年、大正元年～昭和 23 年、昭和 24 年～昭和 52 年と書かれた空のファイルの入った封筒

27. 昭和 24 年～昭和 52 年と書かれた封筒 年表原稿 43 枚

48. 明治元年～明治 45 年と書かれた封筒：明治元年～明治 45 年の年表原稿 非常に重要

が関係するもので、今回記事にしようとしているものが、27、昭和 24 年～昭和 52 年と書かれた封筒 年表原稿 43 枚 であることが分かった。これはやはり年表原稿で、3 部に分かれていて、今回の分が昭和 24 年～昭和 52 年の東京天文台の年表原稿であることが分かり、これも非常に重要な資料である。

そこで、東京天文台百年記念誌資料を見直してみると、アーカイブ室新聞 349 号 (2010 年 6 月 11 日) 「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料ーその 2ー」の中に 22 大正元年～昭和 23 年と書かれた封筒 年表の原稿 39～84 ページという項があることがリストにあることが分かった。これで東京天文台の明治元年から昭和 52 年までの年表の原稿が存在していることが分かった。東京天文台 100 周年記念誌作成時に、1968 年(明治元年)～1977 年(昭和 52 年)の 109 年の年表原稿ができていたことになる。これがどのような形で出版されたか、今の段階では明らかではない。もし出版されていないなら、今からでも出版したいと思う。東京天文台 100 周年記念誌資料のリストを作成した段階では、この資料の重要性に気付かなかったが、これは担当者の大きな労作と言える。

今回は、その原稿をアーカイブ新聞 817 号～820 号と同様に原文の儘紹介しておきたい。

昭 和	号	要 項	出 典	頁 No.
24	(1949)			
24	2 28	東京天文台本館の新築	東京大学一覽 昭44-45	16036
24	5 7	東京天文台基礎実験倉庫・国際報時局舎・同宿舎・国際報 時差電池モーター室・国際報時計物置 同ポンプ室 etc.に 測地学委員会より所屬督した。	東京大学一覽 昭44-45	16035
24	5 31	法律 150号、国立学校設置法の公布。附置の研究所と(東京 大学に……、東京天文台……を置き……東京天文台官制の廢止	東京大学一覽 昭44-45	16034
24	5 31	国立学校設置法。(附則:東京天文台官制の廢止) 国立大学に次の表に掲げるとおり、研究所を附置す。 東京天文台 目的-天文学に關する事項の研究及び天文觀 測並にこれ 曆書編成、中央標準時の決定及び現在並 にこれに關する検査に關する業務	東京大学一覽 昭44-45	16004
24	5 31	国立学校設置法 法律 150号 附則之により 大正10年勅令第450号を廢止	天文台関係法令集	14005
24	6 8	東京天文台コナ観測所週報 No. 1 石川島重工業株式会社と 請負契約を結ぶ。(東京大学常務課長 石川島重工業 25.8.15迄 コナ観測所建設の苦心。写真あり。	月. 43-10, p.107 (昭25.1950)	5044
24	6 15	建物 日産土木株式会社と請負契約を結ぶ。	"	"
24	夏	東経観測所第一期工事開始	東京大学一覽 昭18-27	16062
24	8 11.12	コナグラフにヒルガの分光器を取り付け観測中 5303の線 が輝線と成つて輝いてゐるのを(複製)日本に初めて日合時 以外にコナの線を認めることのできる記念すべき日。(兼 観測紀行(2) 山の日記。4場 遠記)	月 42-1, p.6 (昭24.1949)	5040
24	9 26	東京天文台コナ観測所の観測室の新築	東京大学一覽 昭44-45	16033
24		東京天文台で教官制が併置	科学史研究 17号	18443
24		東京天文台に教官制 設けらる。 定地政司、土佐助 兩博士 教授に。 片瀬秀雄、火田中 武夫 兩博士 助教授に	月. 42-5, p.35 (昭24.1949)	537
24		東京天文台太陽コナ常時観測所の東峰岳に落成。(摩利支天 岳頂 標高 2570m, 主位所 附設夫)	科学史研究 17号	18436
24		東京天文台で天体電波受信装置を備付(主任 火田中武夫)	科学史研究 17号	18437
24		東京天文台にて 波長 1.5m用の特殊アンテナ建設中 コーネル大学にて cm波用の直径 17フィートの反射型ラジオ 望遠鏡が完成。日本の電気通信研究所にて、波長 5mの 特殊アンテナ建設中	月. 42-5, p.32 (昭24.1949)	5041
24		東峰岳コナ観測所月起工、11月竣工完成。石川島重工業株式 開始(兼東峰岳コナ観測所と兼有試験観測所附設夫記) (施設と観測生活の概要記事)	月 43-6, p.64 (昭25.1950)	5042

昭和	要	項	出典	カーNo
24 (1949)				
24	本田 寛が太平洋天文学会からド・ホー・メルに受賞 (観測誌2)		科学史研究才17号	18438
24	官地政司が経度変化の研究により朝日文化賞を受賞		科学史研究才19号	18439
24	日本天文学会にて Publication of the Astronomical Society of Japan を発刊.		科学史研究才19号	18440
24	東京天文台天文普及会・中央气象台測候研究会共同編集 "天と気象" を発刊.		科学史研究才17号	18442
24	水沢緯度観測所にて創立50周年記念式を挙げる.		科学史研究才17号	18444
24	5m x 2.5m フォードサイドプレイ 1949 (昭24)		赤羽氏	13001
	200 MHz 太陽電波強度連続観測 (9月11)			
24	学術研究会議編集の科学技術史の天文関係分担執筆委員の採定される		科学史研究才17号	18434
24	文部省科学研究費配合審査委員の天文関係委員の採定される		科学史研究才17号	18435
24	東洋天文協会にて機関誌 "天界" を復刊		科学史研究才17号	18441
24 / 22	勅令(政令)による人事 文部教官 1~2級 4, 3級 4, 文部教官 2級 13 3級 28, 文部事務官 3級 4		天文台関係法令集	14010
24	三陽の最初のアンテナ (1949) 写真あり. (電波天文学の進歩をめぐって 天中天文誌)		月 47-5, p. 204. (昭29, 1954)	5074
24 /	精密天文時・恒星位置の2部門が初めて認められ教官制への移行が始まる		天文台100周年年表等	
24 2	7部 28課の新機構を整備		"	
24 4	天体電波研究課を加えて25課とする		"	
24	太陽面現象報告発刊 (昭46, Vol. 2272)		"	
24	LPソリッド子午儀によるわか国初の本格的星表出版		"	
24 5. 31	国立学校設置法施行規則の制定され 教授・助教待遇の定員を規定		"	

昭和	要	項	出典	カーNo
25 (1950)				
25 3. 31	東京天文台本館を新築 (木造 75坪 250の分光実験室)		東京大学一覽 昭44-45	16032 ()内 100年記念号より
25 7. 26	米野コロナ観測所開所式 行われる. (野附誠文記) (式次第, 試験観測経過, 試作コロナグラフとカメラの 分光器の写真あり.)		月. 43-10, p 105 (昭25, 1950)	5043
25	2連ハ本 100 MHz 1950 (昭25) 2連ハ本 67 MHz 太陽電波強度		赤羽氏	13002

25. 1. 10	小川清考 死去、明治15年、明治35年物理学校卒業後天文台に聘せらる。傍ら測地学委員会 嘱託、と云り、藤、湖沼の各調査研究に従事。(菅田繁造記)	月. 43-4 p. 37 (昭25. 1950) 月 43-2, p. 19 2-2	18
25	3mと5mの波長で太陽の観測が始めらる(電通天文学の進歩をたどつて、K田中武夫記)	月 47-5, p. 24 (昭29. 1954)	5074
25	三鷹の10メートル電波望遠鏡 茨城台長のもとに建設計画の大綱をまとむ(赤羽登司)	月 63-2, p. 49 (昭45. 1970)	5183
25	赤羽に12cm コロナグラフの作り方のコロナグラフに代つて据えつけられた。世界で最も小型のクラスに属するコロナグラフ 清水一郎記	月 63-12, p. 329 (昭45. 1970)	5192
25	2月7日、スピカの掩蔽光電観測に成功。移動用30cm 反射望遠鏡購入。	天文台100周年誌より	
25. 9. 12	帯広部今日会を初めて電波観測(畑中ら)	"	
25.	及川貞部、木野長平両氏 東京天文台退職	月. 43-5, p. 22 (昭25.5)	43-5-2

期 和	要 項	出 典	カドNo.
26 (1951)			
26. 1. 1	昼夜連続24MC, 8MCの標準電波に載せて放送した11分毎の形式が1951年1月1日、午前9時から変更される。新しい報時機送波(4MC)は毎日完全連続されるが毎分0.02秒だけ切るとして時を報知する。但し、毎分0秒は切断の長さが0.2と云る。これは電波が切れて後始まる瞬間が正しい秒の4分の1である 東京天文台 報時研究課	月. 43-11, p. 127 1950 (昭25) 月. 43-12 p. 142 1950 (昭25) 同-昭25年	5025
26. 8. 10	関口鯉吉死去 前東京天文台長 65才。心臓麻痺にて錦倉市の自宅で急逝。明治40年2月 東京帝国大学理学部卒業、同即年と云り才氣家に入。大正11年 中央气象台に改称され昭和2年より理学部講師、昭和11年理学部教授と云り、東京天文台に補せらる。空兵、平兵。主要論文目録あり。	月. 44-9, 表紙より 1951 (昭26) 月. 44-10 p. 147 1951 (昭26)	19
26	30cm 天体写真機。1936年6月 北海道日食の際、インシラシンの効果検査のための使用されて以来、招台場所等の関係で使用不能の状態であったが、東京天文台の東南隅に新設中の6mドームに収められ、主として小惑星の観測に使用されることとなる。マウンティングは従来のものが火災で焼失したので、完全の筒古、トロンラムスの装置に取替けて使用される (石塚 富田記)	月. 44-8 p. 114 表紙より 1951 (昭26)	5046
26	掩蔽光電観測に使用中の反射望遠鏡 (石塚 富田記)	月. 44-8 p. 114 1951 (昭26) 表紙より	5027
26	東京天文台 保時と報時関係の方針を整理されることになり工事進行中。	月 44-11 表紙より 1951 (昭26)	5048
26	小惑星 彗星部門設置。子午線の恒星観測開始	天文台100周年誌より	
26. 6	計量法「時間の単位・秒は平均太陽日の86400分の1として東京天文台が決定する時間と現示する」と制定	"	
26. 12	太陽面現象の日々の観測結果を電報により全世界に放送開始(ワルシケラム)	"	

昭和	要	項	出	典	カードNo.
27 (1952)					
27	2mφ (トランシット型) 3000 MHz 太陽電波強度		赤羽氏		13003
27	ロンビック (木製) アンテナ 100~140 MHz 太陽電波動		赤羽氏		13004
	スアートル				
27	マイクロストレーターの設置 (未記)		月. 45-1, p.10		5049
27	東経コナ観測所に新設された日本光学製コナグラフ-類		1952. (昭27)		
27	光電測光装置をとりつけた東京天文台の26インチ屈折望遠鏡		月. 45-2, 巻紙写本		5050
	遠鏡 一字兵-		1952. (昭27)		
27	東京天文台に新設された太陽電波観測用の2mの反射鏡		月. 45-4, 巻紙写本		5051
	一字兵- 鏡の背部にあるものは3000 MC 受信用の		1952. (昭27)		
	オノ検波増幅器を54" 準波管		月. 45-6, 巻紙写本		5052
	鏡の背部にあるものは3000 MC 受信用の		1952. (昭27)		
27	10m の電波望遠鏡 建造中. 反射鏡の鉄骨完成し		月. 45-7, p.107		5053
	天文台に搬入される. 総重量 8トン.		1952. (昭27)		
27	八幡野 夜光観測所 古畑記		月. 45-7, p.107		5054
	電磁層委員会との協同観測が年に4回行われ, その時夜光の		1952. (昭27)		
	強度の記録をとる. 以前は東京天文台で行っていたが				
	4年ほど前からこの地で観測.				
27	報時設備, 水晶時計		月. 45-8, p.123		5055
	国内の希望と, 諸外国との均衡をけるために整備を急いで		1952. (昭27)		
	いた報時設備の約半分が出来上った.				
27	東京天文台の浮島天頂筒の頭部 一字兵-		月. 45-12 巻紙写本		5056
27	出版		1952. (昭27)		
	東京天文台年報 (昭文), 東京天文台報 (邦文)		東京大学一覽 昭18-27		昭28, 29 年巻と同様 昭30~33 年巻 昭34 年巻の 加わって13
	東京天文台 天文短編報告 東京天文台 天文研究報告				
	東京天文台 太陽電現象報告 暦象年表 等				
27	天体電波部門設置.		天文台100年 昭新巻11		
27. 8	3000MHz の連続観測開始		"		
27. 10	水晶時計部が整備されリ-フラーの使用停止		"		
27	ローマの国際天文学連合総会で暦表時採択		"		
27	板垣 権宗 教授 3月13日 地理調査所に転任		月. 45-5, p.74. 昭27		13005

昭和	要	項	出	典	カードNo.
28 (1953)					
28. 10. 1	東京天文台 才21号宿舍 22棟を大蔵省引継ぎ		東京大学一覽 昭44-45		16031
28	10mφ赤道儀式		赤羽氏		13005
	3000 MHz, 200 MHz				
	太陽電波, 月面電波				
28	ロンビック アンテナ 2基		赤羽氏		13006
	200~700 MHz 太陽電波 動スアートル用				

28	3.	14	740吋反射望遠鏡建設、學術會議天文學研究連合委員会決議	月47-8, p.119. 1956 (昭31)	5083	
28	3.		摘要「精密天文時計の研究」, 「恒星位置の研究」, 「流星彗星衛星の研究」, 天体望 望の発展の経緯, 天文時計, 射線部, 天体物理学部, 合衆部, 太陽物理部, 天体物理学 専修部の7巻26課.	東京大学一覽 昭18-27	16052	
28	3.		職員(昭17比2人) 会長萩原雄祐, 教授助教授, 梅田 義雄, 田中武夫, 木沢 清輝, 天文学部 海野 三郎, 佐藤 三, 有原 田三, 前山 小部 田中 正, 鹿野 正久, 竹田 誠 長沢 忠年, 小倉 信介, 鈴木 重彦, 鈴木 實雅, 高瀬 文吉 (昭31昭32), 小松 繁 (昭32)	東京帝国大学一覽 昭18-27	16085	
28			740吋反射天体写真機の改造完成 富田 記	月. 46-1, p.15. 1953 (昭28)	5057	
28			東京大学教壇3周年記念7名院士原住長野 敬助, 西尾 三, 田端 治, 氏村 辰雄	月. 46-6, p.93 1953 (昭28)	5058	
28			740吋鏡を日本に. 萩原雄祐 740吋の望遠鏡, F=4. 建造に金約3億円, 製作は5年かゝる 見込中, 日本学術会議14回総会の議を経て政府に要望中.	月. 46-7, p.104. 1953 (昭28)	5058	
28	5.		東大新制大学院 1953年5月より発足	月. 46-8, p.121 1953 (昭28)	5059	天文台100周年記念 4月設置とあり
28			完成近い大電波望遠鏡 一宗 具一 (野天文台)	月. 46-9, 表紙 1953 (昭28)	5059	
28			大電波望遠鏡完成し調整中	月. 46-9, p.135 1953 (昭28)	5060	
28			75周年 記念の備し. 明治11年 東京大学内に東京天文台発足 昭和28年が75周年に当り 記念. 催しは10月29日, 30日 予定されている.	月. 46-10, p.159 1953 (昭28)	5061	
28			東京天文台創設75周年に際して. 萩原雄祐	月. 46-11, p.163, 1953.	5062	
28			東京天文台75周年史年表 明治11年(1878)-昭和27(1952)迄. 表題カット 観望台の写真	75周年記念特集 月. 46-11, p.164, 1953 75周年記念特集 1953 (昭28)	5067	
28			天文台の思い出 - その1. 早乙女 瑞彦 (記)	月. 46-11, p.165, 1953 75周年記念特集	5062	
28			天文台の思い出 - その2. 橋元 昌集 (記)	月. 46-11, p.166, 1953 75周年記念特集	5063	
			昭和初年三席の東京天文台全景写真 昭和3年頃撮影 記念写真			
28			天文台の思い出 - その3. 田代 三郎 (記)	月. 46-11, p.168 75周年記念特集	5064	
28			天文台の思い出 - その4. 幸田 惣彦 (記)	月. 46-11, p.169. 1953 (昭28)	5066	
28			天文台の思い出 - その5. 中村 富蔵 (記)	月. 46-11, p.168	5065	
28			無題. 辻 亮三郎 記	月. 46-11, p.170	5070	
28			台観望の思い出. 山田 吉雄	月. 46-11, p.171	5069	
28			東京天文台創設75周年式典	月. 46-12, p.186 1953 (昭28)	5071	
28			太陽の観測に10cmの望遠鏡を加ふる	月. 47-5, p.74. 1954 (昭29)	5074	
28			台観望の観測所に望遠鏡増設 (昭附新天文)	月. 52-10, p.197 1959 (昭34)	5076	

昭	30	要	理	出	頁	ナ-1-No
28	(1953)					
28	3	写真天頂筒 口径 10m ハテララマニ完成		天文台100周年記念年表		
28	7	天文台部長会 内観方上 台長 6名に 教授推薦 内観同志		"		
28	12	740吋反射望遠鏡建設委員会 発足.		"		
28	12	30cm 東京天文台写真機を新観望所に設置.		"		

昭和	要 項	出 典	頁No
29 (1954)			
29	2m x 5m (ビームアンテナ) 4基 1954 (昭29) 200 MHz 太陽電波干渉計完成	赤羽氏	13007
29	2m x 8m (ビームアンテナ) 1954 (昭29) 太陽電波スペクトル用	赤羽氏	13008
29	フロッピー天体写真機 口径20cmの従来のカメラに口径16cmのZeiss Astro Tessarの副カメラ併設	月. 47-2 巻紙写真, 1954 (昭29)	5072
29	74吋反射望遠鏡の計画について 藤田義雄	月. 47-5, p.70. 1954 (昭29)	5073
29	電波天文学の進歩をめぐって 畑中武夫 最近三鷹では直径10mのハーフボウテキ上。又干渉 偏波 スペクトルの観測装置を設けて上りつゝある	月. 47-5, p.74 1954 (昭29)	5074
29	天文台と飛行場問題	月. 47-6, p.86. 1954 (昭29)	5075
29	東京天文台に新設のアンテナ群. 菱形アンテナ, 10mハーフボウ 字あり.	月. 47-10, p.158. 1954 (昭29)	5076
29	天体電波観測用アンテナ群の一部 <写真>	月. 47-11. 巻紙写真 1954 (昭29)	5077
29	天文台と飛行場. 東京天文台隣接の調布飛行場問題について	月. 47-12, p.182 1954 (昭29)	5078
29	職員. 昭29年現在 (昭和28年度と異なると) 教授, 助教授, 教官. 熊谷豊夫, 二宮金作, 安田春樹, 宇山史生 昭28. 昭29. 昭30. 昭31.	東京帝国大学一覽 昭28. 29	16086
29. 6	74吋反射望遠鏡建設 第19回 国会で予算措置可決す。	月. 47-8, p.119. 1956 (昭31)	5083
29 12. 18	74吋反射望遠鏡設置場所の選定の予備観測 27. 12. 18 に開始. 約1年 新月をばたく 毎月10日毎	月. 47-8, p.120 1956 (昭31)	5083
29	集積コナ観測所に水素H α 線による紅雲の自動早期撮影 装置の完成. 紅雲観測室構築された (野村誠之)	月. 52-10, p.197 1959 (昭34)	5076
29 1.	三鷹に極望遠鏡の観測開始	天文台100周年表上	
29 9	調布飛行場を運輸省が管理し使用する場合の申し合わせ成立.	"	
29	188cm 反射望遠鏡建設地選定のための試験観測を長野 岡山・静岡の3ヶ所で行った。	"	

昭和	要 項	出 典	頁No
30 (1955)			
30 9. 28	東京天文台三鷹 2370坪購入	東京大学一覽 昭44-45	16030
30	天文台復興の芽生え 灰原隆平記	月. 48-1, p.11. 1951	5079
30	74吋鏡建設地選定のための試験観測 下村 記	月. 48-2, p.30. 1952	5080
30.	74吋試験観測 7月以降. 静岡県での試験観測地は栗太嶽上り, 島田市檜崎 (海拔400m) に移された。	月. 48-8, p.130. 1955	5081
30. 2. 11	田代三郎死去. 83才 神経痛, 余癌併発 新聞, 観測. 報時 及び3方面に活躍 昭29. 昭30. 昭31. 昭32 平賀 幸田啓造記.	月. 48-6, p.29. 1956	20
30. 6 1	74吋反射望遠鏡建設委員会成立 萩原東京天文台長 委員長 (平川平吉全上昭31)	月. 49-5, p.119. 1956 (昭31)	5083

30 2.	ガラス・パーソニクス会社東京代理店工ア. プラン・マクフレレン株 式会社東京支店と正式契約, 発注	月. 49-8, p. 119 1956 (昭31)	5033
30 秋	74吋反射望遠鏡トーム設計について, 昭和30年秋東京天文台 大沢教授と杉植とが下り加施設視察	月. 52-2, p. 34 1957 (昭32)	5091
30. 6.	74吋反射望遠鏡建設協議会 設置 昭和30年6月	"	5091
30.	兼務コト観測所に研究室増築	月. 52-10, p. 197 1957 (昭32)	5096
30	太陽面現象部門設置	科学文芸誌 1007 昭和32年	
30 6. 20	セロノ島日食入り (古田町), 鹿見島で電波トーム観測 成功 (宇山, 赤羽)	"	
30	高倉産雄 大阪市立大で天体電波を研究して以来東京天文台に 転任	月. 48-1, p. 6 (昭30)	小774

昭和	要 項	出 典	カードNo.
31 (1956)			
31 6. 11	74吋鏡建設地決まる. 1954年暮以来, 長野 静岡, 岡山の 3県下で行われた試験観測の資料, 他諸条件を総合的に 考慮した末, 74吋鏡建設地を岡山県に決定し6月11日発動	月. 49-7, p. 112 1956 (昭31)	5082
31 6. 11	74吋反射望遠鏡建設への道 藤田良雄記 岡山県に観測地選定 山西方の竹林寺山 最適と認め 6月11日 文部省の正式発表	月. 49-8, p. 119 1956 (昭31)	5083
31	大沢清輝 米國から帰国し, 東京教授(東京天文台勤務)に昇任	月. 49-7, p. 112. 1956 (昭31)	5080
31	東京 藤田良雄教授 74吋トーム設計がフ会社への要請と, リエー江の天体物理学シンポジウムに出席のため7月上旬渡 欧予定		
31 11	有田邦雄死去. 長崎市の自宅で没 73才 明治35. 19才 物理学校卒業 報時観測. 大正11 長崎に昇任 (長崎県権球観測所技師212) 天文学会創立 發起人の一人. 天文学会創立, 發起人の大 天文学会発行「星座早見」 「恒星団」 小倉博士と有田氏 の完成.	月. 50-1, p. 14 1957. 1 (昭32) Echo Echo 不詳	21
31.	兼務コト観測所にコト等光観測用のリトフィルタが増設.	月. 52-10, p. 197 1957. (昭32)	5096
31 6	天体電波部が分光部と, 測光部が天体探査部に独立 し, また天文台分課規定を定め8研究部27研究課制實施.	天文台100周年誌 昭和32年	
31	千葉県死山に夜光観測所開設.	"	
31	ヨーロッパ向けロケット型受信空中観新設.	"	
31	世界時UT2採用. 曆表時の秒定義	"	

昭和	要 項	出 典	カードNo.
32 (1957)			
32 1. 17	74吋反射望遠鏡の設置場所を中心とする半径約2km に及び地域 (約360万坪), 昭和32年1月17日の官報で 食塩禁止地域に指定する.	月. 50-3, p. 41, 1957 (昭32)	5084

32.	74吋ドームの設計はじまる。ドーム室の建築設計 本格的段階に入。東大管轄課長、工学部 5 教授、東京天文台 5 委員を含む委員会 研究始める。	月. 50-3, p.41 1957(昭32)	5084
32. 3. 31	東京大学教授兼東京天文台長 萩原雄祐 昭和32年3月末定年退職。東北大学教授に転任。	月. 50-5, p.25, 1957 (昭32)	541
32. 4	東京天文台長 後任 官地政司 就任早にの4月15日人工衛星の研究、連絡の在り空路渡米。	月. 50-5, p.25, 1957 (昭32)	541
32	東京天文台 古畑正和 教授に昇任	月. 50-7, p.114	542
32	萩原雄祐氏 東京大学名誉教授に	月 50-9, p.136	542
32	1.2 mφ, 9,500 MHz 太陽電波, 強度, 偏波	赤羽氏	13009
32	200 ~ 210 MHz 太陽電波スペクトル	赤羽氏	13010
32	7月単色太陽写真集が設置され, 11月より連続撮影開始。	天文台100年 昭年表11	
32	新観測地選定の在り常平山で試験観測開始	"	
32 11	人工衛星才1号打上げ成功 (ソ連)	"	
32 12	30 cm 望遠鏡にマルコフカメラ設置	"	
32	塔望遠鏡の新しいシーロスタート鏡 (塔南水晶製) 塔望遠鏡 昭和32年に大改装施し, 面目一新。	月. 51-2, 表紙 月報天文台 1958(昭33)	5086
32	IGY (国際地球観測年, 1957-58),	天文台100年 昭年表11	
32 4	測光部に大口径世界資料センター設置。初めて南極観測隊に参加 [大口径望遠鏡] (中村純二)。	"	

昭和	要 項	出 典	ナ-№
33 (1958)			
33 7.	文部省測地学委員会三應国際観測所の経度研究に因る人員及び施設が本台に移管された。昭和33年7月	東京大学一覽 昭 18-27	16063
33 10. 13	スワロフ島の皆既日食 (日本観測隊)。10月13日南太平洋皆既日食。全観測予定成功裡に終了	月. 51-11, p.212 1958 (昭33)	5089
33 12. 17	74吋ドームの起工式。官地東京天文台長から岡山天文台を東京天文台岡山天体物理観測所と呼ぶと発表する。74吋の他 日本光学製の36吋も設置された。	月. 52-1, p.12. 1959 (昭34) 月 52-2, p.111-9 写真あり (1-8)	5090
33. 12. 17	東京天文台岡山天体物理観測所 74吋反射望遠鏡ドーム起工に際して 東大管轄課長 植穂芳男 観地園刊。	月. 52-2, p.34 1954 (昭34)	5091
33	昭和33年の現状 六 講座 「精密天文時」, 「恒星位置」, 「小惑星彗星, 流星」 「天体電波」, 「太陽面現象」, 「彗星, 新星」 八 部 天文課部, 子午線部, 天体掃索部, 測光部 合光部, 天体電波部, 太陽物理部, 天文計算部	東京大学一覽 昭 30 ~ 33年表	16051
33	昭和33年現在職員 (昭和29年と異なり人) 台長 官地政司。教授 加藤健, 技官 鈴木政広 高倉隆雄, 岡口直伸; 事務長 布川銀次郎	東京大学一覽 昭 30 ~ 33	16075

33	高畑文太郎 昭33 東京天文台から 30 教授として 東京天文台に 移す	月. 51-6, p.110 1958 (昭33)	5083
33	東京天文台に新設のリオ型太陽分光装置, フランス SECASI 社製の太陽分光写真機が取り付けられ活動開始	月. 51-1, p.17 1958 (昭33)	5085
33	24吋反射望遠鏡の完成の時期 グラフ・ハーソンス社から 貿易会社を通じて電報で通知(7月16日)によると 24吋が完成して発送のため梱包された日時は 1959年秋の予定. 付属分光器は同年7月に梱包完了予定	月. 51-3, p.58 1958 (昭33)	5087
33	ペッカー・ナンのシュミットカメラ (広畑秀雄) p.88 月報 P.14 3月23日 東京天文台到着 組立 東京天文台に組立てられた人工衛星観測用シュミットカメラ	月. 51-5, p.88 表紙写真, P.14 4頁 1958 (昭33)	5088
33. 4. 19	ハヤカ 種子島全環食, 晴, 成功 (青森).	天文台100年 昭33年	
33. 10. 12	スワロフスキー 日食, 晴, 成功 (東京).	"	
33	IGY 終了	"	

77

昭和	要 項	出 典	頁 No.
34 (1959)			
34	人工衛星観測者への感謝状. IGY 期間中の人工衛星観測には日本の貢献が著しく, 観測結果は国際的に高く評価された. 東京天文台 BN シュミットカメラの精密観測の他にアマチュア観測者の協力あり.	月. 52-2, p.33 1959 (昭34)	5092
34. 8. 13	アメリカ科学アカデミーからの感謝状. 8月13日, 日本の人工衛星観測班の功績, 特に優秀な成績を上げた16観測班に感謝状送付. 加川, 札幌, 仙台, 水沢, 北海道, 東松山, 香取, 武蔵野, 三鷹, 真鶴, 四日市, 極原, 金屋町, 金光, 宮崎, 鹿児島	月. 52-10, p.211 1959 (昭34)	5095
34	太陽電波の動カスヘトル用電波望遠鏡 [宇兵] 8月29日に観測された典型的な Type-II のバースト現象あり. 直径 6m. 焦点距離 2.6m の金属の物面鏡	月. 52-11, 月報 P.14 1959 (昭34)	5099
34. 9. 25	東経10周年記念式典. 創立10周年にあたり, 9月25日東経山頂上に於て記念式典. 東大各研究所長, 地元代表他多くの来賓あり. 24日に太陽周年のシンポジウム同時開催. 東京天文台では, 三鷹と三台員を兼ねて10月1日に式典と行な	月. 52-11, p.36 1959 (昭34) 月報 P.14 主催	5097
34	東経20周年観測所10周年を迎えて. 野附誠次 観測員室増築	月. 52-10, p.197 1959 (昭34)	5096
34	初代班長 東経20周年観測所 [宇兵] (F-4内 12m コウラツ)	月. 52-11, 巻紙 1959 (昭34)	5098
34	グラフ・ハーソンス工場内で 研磨を完了した 24吋主鏡	月. 52-12 巻紙写真 1959 (昭34)	5101
34	グラフ・ハーソンス 訪問記 (大畑)	月. 52-12, p.252 1959 (昭34)	5101
34	岡山天体物理観測所の近況	月. 52-12, P.14 1959 (昭34)	5100
34	24吋と36吋ドームの建設工事 写真 1~6 迄	月. 52-6, 月報 P.14 1959 (昭34)	5094
34	年次報告 (1957, 58合併) 発刊	天文台100年 昭33年表	
34	IGC (国際地球協同観測 (1957))	"	
34	第4次南極観測隊 巻頭 (中村 強)	"	

この号では、昭和 24 年から昭和 34 年までの 11 年間の年表を掲載した。事後には昭和 35 年分から掲載する。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp